

新刊  
紹介

For some in ancient books delight;  
Others prefer what moderns write:  
Now I should be extremely loth Not  
to be though expert in both.

『英語教師の悩みと喜び』

アリス・イ・ゲイン著・平岡澄江訳  
(同志社・A5判・九五頁・二〇〇円)

一九二二年十月、アリス・イ・ゲイン先生は、ケネディスクールオブミッシヨンを修了して、翌年、宣教師として日本にやってきました。年は僅かに二十六歳の美しい一米国宣教師として日本に来たのであった。今から数えると約五十年前になる。故国アメリカを離れて、はるばる此の日本に来た一外国婦人にとっては「見るもの、聞くもの」凡ては好奇心を持つものばかりであり、また反面に異様なものとして

写ったに相違ない。彼女自身、この書物の中で、日本人々々私を、何処に行っても好奇の目で眺めた。それは私を疲れさせ気さぶさがせるばかりであった、と記している。この美しい宣教師としての一米国婦人にそがれた日本人の眼は、決して暖い、またやさしいものばかりでなく、風俗、習慣を異にする此の外人婦人の立ちふるまいを容易に理解し、受け容れるには非常に困難であったことは無理のないことであった。

「あなたは生涯この異国にいるつもりなのか」と親しい友人に問いかけられて、自分にはたして生涯異国でいられるだろうか？と自分自身に問いかけ、不安を抱いている。

そうした不安や、異国での好奇心の眼で見られつつも、約五十年間、主として日本人のために、特に英語の教師として捧げ、日本の土となったのは、どうしたわけであるのか。その秘密がこの書の中にやさしく且つ興味深く語られている。

それは彼女が次第に日本が好きになり、また日本で英語を教えることに使命観を持つようになったのは、彼女の内に秘めてい

た彼女の誠実さが、相手の日本人に感銘を与え、それが再び「彼女の胸に、心に」はね返って来たからである。

教育とは元来そういうものなのである。彼女は教え子の心の奥底深くにまで飛び込んだ。また日本の家庭の中まで深く座り込んでいる。そしてその家族の人々と一緒にになり、深い信頼を得ている。つまり日本を愛し、日本人の気持をよく理解し、更に日本で教えることに生き甲斐を持つことが出来るようになったからである。

日本の土地で教師として生きることに無上の喜びと、感激があったのである。それが具体的には毎時間の授業の上に現われた。それはまた若い学生の胸にピンピンと訴えるものを感じさせたに相違ない。

控え目な、ゲイン先生の人柄が、更に日本人の迎えるところとなり、一層の信頼感と、親近感とを覚えさせたようである。

一外国婦人として、約五十年近く、日本のために捧げた、この人のこの随感集は、読む者に多くの感懐と、外国人として日本の英語教育に尽して呉れた深い感謝とを与えずにはおかない書物である。(大江直吉)

## 『青年と政治』

伊藤義清著

(日本YMCA同盟出版部、新書版、二〇二頁、二九〇円)

本書はこの出版のために書きおろされたものではなく、折り折りに執筆してきたエッセイを、新書版にふさわしく編んだものである。

全体は三部にわけられている。第一部は〈対談・政治の焦点〉。これは、著者が同志社(大学院神学研究科)を出ると同時に編集の任にあたった『働く人』誌(日本キリスト教団)に、著者自身が聞き手になって連載した対談集で、ここに登場する人物は河上丈太郎、佐藤忠男、阿波根昌鴻、空戸寛、家永三郎の五氏、論ぜられているのは憲法改正問題、教育疎外、沖繩祖国復帰論、中国文化大革命、靖国神社問題など、いずれも今日的な政治課題である。第二部は『月刊キリスト』誌に六七年の一年間連載の社会時評で「誰がための政治」。そしてキリスト教界関係の諸誌、『朝日ジャーナル』な

どに書いた評論やルポルタージュと講演をまとめた〈人間と政治〉が第三部となっている。

「この本は(中略)少なくとも政治に関心をもつ一人の人間がときには悲憤慷慨し、ときには絶望しながら考え、書き綴ったものを集めたものである。その考えは浅く、的を射ていないことが多々あるだろう」と〈まえがき〉は控え目である。しかし、著者の文章は軽快でリズムにあふれ、論旨明快ずばり核心にふれていく筆力は、たちまち読者をとらえてしまう。ことに青年層を対象とした本書の、これは欠かせぬ条件の一つであろう。

読んでいて、著者自身の体臭、体温を感じさせられるのは、リズムミカルな文体のせいばかりではなく、著者がどこからものを書いているかというところにあるようだ。それは市民の目、実生活者の視角とみたが、その特定のイデオロギー、特定の立場にとられない論述が、本書を身近かなものにしていく。チェコを訪れたときのルポ「プラハの沈黙から」では、チェコの一国民の心象風景に自分をオーバーラップさせ、二

カ月のアメリカ旅行ではたえず日本人としての自分が問いとなって現われる(『アメリカの内憂』)といった具合である。ただ著者自身が立っている場が、心情としては伝わってきて、ことば(あるいは思想)としてはかならずしも明確ではない。それは本書に対しては蜀を望むことになるかもしれないが、すくなくとも著者にとってはこれからの課題なのではないか。

大学問題をとりあげた『若者たちの蜂起』の結びに、新島襄の「我同志社の門をくぐりたる者は、政治家にまれ、宗教家にまれ、実業家にまれ、文学者にまれ、少しく角あるも可なり。奇骨あるも可なり、唯決して彼の優柔不断にして安逸を貪り、苟且姑息の計を為すが如き者たらざること、之れ裏が切に望み、偏に希う所なり」を引用しているあたりは、著者の古風な母校愛のあらわれか、それとも現在の同志社に対する警告か。妙に味わい深い。(工藤)

\*